同窓会会報
第50号
平成4年12月25日
発行所
茨城県東茨城郡
内原町鯉渕5965
鯉渕学園同窓会
〒319-03　TEL 0292-59-2811
振替口座　宇都宮3—1632番
印刷所
佐藤印刷株式会社

地域の青年を学園に！

教務部長　安藤義道

一、学園の近況

十一月二、三日の学園祭は盛況でした。学園農場産の野菜や学生たちが集めた全国の特産物が例年好評で、内原・友部の人々にすっかり定着しました。今年はさらに、新任の杉山助教授指導のもとに生産された本場ドイツ風ソーセージも発表され、注目を浴びました。平素は実習で作られたものが購買部に並べられてとても好評で、学園の新名物になりそうです。

昭和四二年建築の教室本館が改修されます。築後二五年が過ぎ、屋根の雨漏りと窓枠の故障が目立ってきていました。屋根の形状は変更されて切妻屋根となり、窓枠は重い鉄枠からアルミに変わります。来春まで、学生たちは図書館両翼の木造教室などで授業を受けますが、不便ながら思い出のひとつとなることでしょう。

二、編入学希望が急増

普及専攻科を設置以来、各県農業大学校から本科三年への編入学を受け入れています。編入学者は例年三～五名でしたが、今年度は一四名の出願があり、関係者を喜ばせています。

内訳は、鹿児島農大からの九名を筆頭に、岩手、埼玉、広島、島根、大分の農業大学校から各一名。学園の普及専攻科卒業生がつくりあげてきた普及員資格取得と、公務員や団体等の採用試験合格の実績が評価されてきたものと思われます。

鯉淵学園の将来構想論議の一環として、各県農業大学校の「大学院的学園」の恒常化が各方面から提起されています。この分野の使命も大きいと認識を新たにしています。

三、学生募集にご協力を

大学、専門学校はこれから冬の時代を迎えます。来春卒業の高校生から青少年人口が急激に減少し、学生獲得競争が激しくなる中で、学園も対応努力を懸命におこなっています。

本科入学生の「学園を知った動機調べ」では、新入生八八名中、「出身高校指導」が三六名でトップでしたが、続いて「学園卒業生の紹介」が二五名もあり、同窓の皆さんから多大な支援を頂いていることがわかります。

今年度も入学出願がすでに始まっております。昨年度から開始した推薦入学と優先入学（卒業生推薦）の制度によって、各地から願書が届きつつあります。在学生諸君も入学者数には大きな関心をもっておりまして、学生数が多いと学習や寮生活も活気があります。

今後も、皆さんから多くのご推薦を期待しております。

四、平成五年度本科学生募集要項

(1) 募集人員（本科）
　①農　業　科　八〇名
　②生活栄養科　四〇名

(2) 出願手続
　①入学願書
　②身上調書
　③健康診断書
　④課題による作文
　⑤高等学校の調査書
　⑥現住所の市町村または農協組合長などより推薦を得たものはその推薦書
　⑦選考料　二五、〇〇〇円（為替にして入学願書に同封）
　※①②④は本学園所定の用紙を使用

(3) 願書受付期間
　平成四年十一月二一日より平成五年二月一九日までの期間

(4) 選考・発表
　書類について選考し、結果を二月二七日に発表する

(5) 願書など所定用紙の請求は鯉淵学園教務部にお問い合わせ下さい。

（定員に満たない場合は、三月末日までに第二次募集を行うことがある）

副学園長就任にあたって

宍戸弘明

去る一〇月一日付けで鯉淵学園の副学園長に就任いたしました。

この学園には一〇数年以前に、吉川直行先生が学園長として在任されていた頃に伺ったことがあります。家の中から竹の子が生えるあの公舎に私が住むようになるとは、当時思いもよりませんでしたが、それはともかく、畏友

中野先生が薄汚れた研究室に寝泊りして実験に励んでおられた姿を今でも鮮明に憶えています。

あの当時と比べると今の学園は教室も農場も整備されていて、随分様変わりしたなというのが実感です。

学園に参りまして、ここの歴史というか、過去からの流れを少し勉強しています。その歴史は現在も掲げられている建学の理念（ヒューマニティを基調とした、広い視野と科学的な考え方と実践力を育成する……云々）の実現を目指し、教職員、在校生、農民教育協会そして同窓生が苦難の道を切り開いてきた歴史であり、心打たれるものがあります。

私はこの八月に農水省畜産試験場長を退職するまで、三四年余りの畜産の研究に携わってきましたが、教育の面では充分な経験はありません。現在、日本の農業を巡って暗い話題だけが取り上げられていますが、私は農業経営者としての自己責任意識が強く、高い技術力と広い視野をもった農家が育ち初めていることにもっと注目する必要があると考えています。そして明日の農業を担える農業人を育てること、これが日本農業を守り、発展させる最も重要な道だと思っています。

これまで、そうとは知らずに鯉淵学園の優れた先輩方とお付き合いしてきました（非常勤講師をお願いしている中村恵一さんもその一人）。農業に情熱をもつ、個性豊かな方々です。そうした先輩に続く青年を育てられたら、いや育てなければと思っています。

第四七回鯉淵学園学園祭開かれる

十一月二日、三日にかけて第四七回鯉淵学園学園祭が賑やかに開かれました。幸い好天に恵まれ、内原や友部、水戸など近在の人々やご父兄、十三期生をはじめ同窓生の方々などたくさんの人出でにぎわいました。ここ数年学園祭が地域行事として認められてきたようで、今回は二日は月曜日、三日は内原町民運動会の日と重なり人出を心配しましたが、むしろ昨年並かそれ以上だったようです。

今回の前夜祭は初めての試みとして学園祭実行委員長の本野君の発案企画により行灯行列が行われました。これは青森県の有名なねぶた祭りのねぶたの様な大行灯と提灯のような小行灯をつくり、仮装をして友部の町を練り歩くというものです。大行灯は二基で人気アニメキャラクターのどらえもんとあんぱんまんで、中央病院から学園までのコースでした。夜の六時頃、人通りが少ない様子でしたが歩きはじめると家々から子供を抱いた人等たくさんの人々が出て見てくれました。小さな子供たちには小行灯や風船をプレゼントしたのでたいへん喜ばれました。また、学生も多数参加し交通整理をしながら祭りらしく行列を盛り上げてくれました。

過去にも友部の町を練り歩くという行事があったと聞いてますがしばらくぶりの復活といえるかと思います。今回は一、二年生が中心でしたが各寮毎にでも大行灯をつくり、三年、専攻科生も参加するようになれば学園祭名物行灯行列として定着することでしょう。前夜祭のイベントとしては成功したと思います。

主なものを紹介しますと、展示では世界中のカボチャを集めた世界カボチャ展丸川先生のご努力で恒例になり新聞にも取り上げられました。又中野先生が一年間かけて飼育、繁殖して下さいました小動物展示も日頃身近に接する機会が無いのでしょうか、家族連れや子供たちに大人気でした。牛乳消費キャンペーン、搾乳の実演も常連のお客さんには楽しみになってきています。特研展示もじっくりと時間をかけて読んでいる人を見かけました。ゴルフゲームも初めての企画でしたが続ければ人気イベントになっていくとおもいます。

販売で毎回人気の高いのは農場生産物販売。農場の先生方と学生の努力の成果で、何日も前から準備していただきましたが二日めの昼頃にはほとんど売り切れました。学園祭では初めての杉山先生を中心とする手作りハム・ソーセージの販売も新聞に載るなど、大評判でした。全国物産展も昨年から在学生の父兄から農産物などを寄付していただき紹介をかねて販売する方式に変わりましたが、たくさん応募していただきありがとうございました。当地では目にすることの無い珍しい物産が飛ぶように売れました。そのほか食物店、居酒屋やハーブの店、古着屋、二年目になるフリーマーケット等それぞれ盛況だったようでした。

多くの学生諸君の活動と先生方のご協力で無事に今回の学園祭をおさめることができました。学生諸君にとっては学園祭の準備を含めた数週間は大変でしたがある種の充実感を体験したと思うし、終わってからは自分に自信が持てたと思います。これを種に学園生活のより豊かな過ごしかたができる方向へ向くことを期待しています。

毎年お客さんも増える傾向にあり、年に一度の地域交流の機会でもあるので、無理をせずじっくりと、発展させていければと思います。（佐藤記）

平成四年度岩手県支部総会
遠野市で開催される

事務局長　岩持文彦報告

岩手県支部の定例総会は、九月十九日から二十日にかけて、民話のふるさとで知られる遠野市で、民宿「とおの」を会場として、会員二十七名の参加のもとに盛大に開かれました。

久慈宗悦支部事務局長（二四期）の司会進行で、定刻の午後五時開会、小川昭伍支部長（五期）よりのあいさつ、運営報告に続き、小職から、学園近況並びに、同窓会活動の充実、活性化を基調とした本、支部共栄方針を強調して岩手県支部の躍進を期待するとともに、本部活動への力強い支援を要請して祝詞にかえさせていただきました。

議事では、平成三年度事業、会計報告と、平成四年度計画のほかに、組織の充実、強化対策としての規約改正案が承認され、支部の活動体制が一段と整い、前進の運びとなりました。

岩手県では、支部長のもとに、幹事九名、事務局二名、監事二名をおき、更に、地域を十分割し、それぞれに分会長を配置し、きめ細かな運営を図るとともに、総会を、分会持ち回りで実施し、地元会員の利便を図っていることが特筆されます。

これを反映してか、今回の総会には、大洞優分会長（一一期）をはじめ、三七期の宮田秀弘会員まで、遠野分会員の出席が目立って多く、長年にわたる工夫、努力の積み重ねとして確かめられました。

総会は、午後六時、予定どおりに終了し、懇親会に移りました。

民話の郷（まち）に相応しく、大きな「いろり」を囲んだ会席は、特産の岩魚（いわな）を中心に、川魚、山菜の珍味であふれ、今昔の話題に弾んで、先輩後輩一体となって、遠野の一夜を満喫、最後は、スクラムの輪となって寮歌を熱唱、握りたるこの手あの手の温みを確め合いながらの終幕となりました。

後は、街にくりだす者、部屋で更に旧交を温める者さまざまに、一年後の久慈市集会を胸に秘めながら、心ゆくまで懇親を深めることができました。

岩手県支部の皆様、そして遠野分会の皆様、今後、ますますのご発展をお祈り申し上げます。そして、今回の訪問に際して賜りましたご厚情に、深く感謝申し上げつつ、報告といたします。

懇親会に先立ち撮影した記念写真を添付します。顔が一部符合しませんので、出席者氏名を単に列挙します。

②久保良雄　②佐藤　隆　④千葉欣一　④鷹觜　武　⑤小川（金子）昭伍　⑤杉本文午　⑦佐々木羊三　⑦鈴木實　⑨高橋利清　⑪大洞　優　⑫鎌田一久　⑬熊谷（小野寺）達男　⑬道下喜美男　⑬平田　正　⑬留場栄一　⑭芳賀正美　⑮三浦邦雄　⑰斉藤裕夫　⑱菊池雄基　⑲上沢義主　⑲菊地博美　㉒高橋由一　㉓久慈宗悦　㉔加藤勝信　㉗佐々木一夫　㊱菊地貞三　㊲宮田秀弘　以上二十七名、円数字は卒期、敬称略。なお、㉒高橋由一会員は、総会終了後、都合により帰宅、㊱菊地貞三会員はカメラマンで、写真に入っていないようです。

都道府県支部長会議
全国五地域で開催
支部活性化方針推進

平成七年十一月、学園創立五十周年を迎えるに当って、長年の懸案事項である都道府県支部活動の活性化を目指して、先づ、八月二十二日、学園において、関東甲信越福島ブロック都県支部長及び常任委員並びに若年農業経営者等合同会議を皮切りに、十一月十四日、青森市で北海道東北、同二十一日は岐阜市で東海近畿北陸静岡、同二十八日は岡山市で中国四国、最後は、十二月五日、熊本市において九州地域と、全国を五ブロックに分割して支部長会議を実施し、支部組織及び機能の充実強化ノ学園創立五十周年記念事業の進め方及び、学園改組等について協議し、これからの活動を、積極的に推進する方針で合意が図られた。

今後は、支部長会議及び、各都道府

県支部総会並びに、卒期別集会等から寄せられた意見、要望等について、常任委員会において集約し次第、事業反映を図る一方、協会、学園につないで、一層の発展を期する方針である。

詳細については、次回報告とする。

東海近畿北陸静岡ブロック府県支部長会議までの出席者は、次のとおり。

《関東甲信越福島ブロック》

副会長福丸博房⑨、副会長兼常任委員長高橋隆三⑨、福島県支部長山本学⑬、茨城同岩持文彦⑦、栃木同川上忠⑤、群馬県代表橋本実⑥、神奈川県支部長北村康祐②、新潟同黒石勇蔵⑤、山梨県代表中込武⑧、長野県支部長小林道男④、常任委員稲川正夫⑬、同須田哲也⑯、同船橋和江⑲以上茨城、同篠原要一⑩栃木、同加藤成一㉔千葉、同西村典夫④学園以下同じ、同関正治④、同砂田義雄⑤、同坪野敏美⑦、同山本英治㉛、同涌井義郎㉛ 農業経営者等染谷一㉔茨城、同戸塚博昭㉖群馬、同稲村道明㊹埼玉、同富岡忠明㊹東京

《北海道東北ブロック》

大森県支部長鎌田美春⑫、同支部事務局長山田知幸⑮、岩手県支部事務局長久慈宗悦㉓、宮城県支部長菅原寅吉①、秋田県支部代表鈴木重雄⑥、山形県同石塚忠②、副会長兼常任委員長高橋隆三⑨、事務局長岩持文彦⑦

《東海近畿北陸静岡ブロック》

富山県支部長竹内敬俊⑪、石川県同木本貞成⑤、岐阜県同斉藤茂作⑦、静岡県支部事務局長平石五雄⑭、愛知県支部長久胡信隆㉑、三重県支部代表山中種郎⑦、滋賀県支部長高田利通①、京都府同稲上知①、兵庫県同足立優⑦、奈良県同吉谷澈⑧、常任委員坪野敏美⑦、事務局長岩持文彦⑦

四期生大集合

一、昭和六十一年に鯉淵を卒業以来初めて全国集会が茨城で開かれた。以来五年余、大方の人達が老齢年金を貰う時期となり、同期会を開いてはどうか、今回は東京でどうかという声があり、東京で私が中心になって、大竹、秋田、武内、磯田、牧野、中村、金子の各氏に呼びかけ、東京幹事会を発足させ、数回にわたって協議をし、以下の日時と場所を決めた。

六月のことであった。

○日時　平成四年十月二日㈮
　　午後五時三〇分

○場所　南青山会館
　　（農水省共済組合）
　　東京都港区南青山五―七―一〇

二、招集の連絡は学園にいる西村氏に依頼し、一〇〇名に往復ハガキを出し、七五名から返信があった。このうち四一名と奥様二人が出席。ロビーでの受付では、名前と顔が一致せず、戸惑いもあって賑やかな風景

が繰り広げられた。名前が解ってみればアッソーカという具合いに、四〇数年振りの握手と在学時代に話の花が咲き、ロビーはただ事ではなかった。

青春時代の思い出はつきないようであり、北海道から九州までの高齢者が四〇数名も集ったのだから仕方のないことでもあるが、来賓の近秀次先生が四期生には特別の思い出があると祝辞を述べられると、あの堀建小屋で暮したことが信じられないというほどの気持を皆んなが抱いていた。四〇数年のそれぞれの人生をそれぞれに生き抜いた心意気と満足感が漂っていた。

三、セレモニーは短く、懇談は長くという主旨で運営したが、今後の四期会運営として次のことを決め、全員の賛同を得た。

第一は、各ブロック持回りで毎年開催すること。ブロック代表は北海道（佐藤存）東北（鷹觜武、桑名健一、井上昭二）関東甲信越（小泉真吉、上島博人、武田十郎）東海北陸（今村逸雄、森健二）近畿（藤井文信、伊福靖）中国四国（小堀武臣、原口隆雄）九州（小林康則）となった。

会合の都度、翌年の開催場所を決定し、申し送ることとなった。

第二は、来年度（平成五年）は東北ブロックとなり、代表幹事で協議の結果、宮城の松島と決定。意見のある方は、宮城の井上昭二氏までどうぞ。

四、午後八時四〇分、寮歌の音を胸に秘め解散。来年の再会を誓って会場を後にした。（代表幹事　満永正昭）